《正岡子規（36）の続き》その287

平岸　三八

羯南の「日本」は、政論新聞としての評価は高かったが、一般向きではないので売れ行きは悪く赤字つづきであった。明治34年12月には近衛篤麿（文麿の父）の援助を受けていたが、39年6月には遂に伊藤欽亮に譲渡した。その前年頃から肺結核の徴候があらわれ、湯河原に転地療養した。40年1月には鎌倉の別宅で病を養い9月2日そこで歿した。戒名は文正院介然羯南居士。

羯南と子規との関係については、この正岡子規の本文中にかなり詳細に記述したので、それ以上については省略したい。

列伝④　伊藤左千夫（享年50歳）

生年一八六四（元治元・八・一八）
歿年一九一三（大正二・七・三〇）
死因　脳卒中

文学的には歌人、小説家であるが、生業は牛乳搾取業である。

現・千葉県山武郡成東町殿台に、父伊藤良作、母なつの四男（末子）として生れた。生家はかなりの資産を有する農家であった。

強度の近視のため明治法律学校（現・明治大学）を中退し、兵役も免除となり、明治18年上京し京浜間の牛乳屋で働いた後、22年4月独立して本所区茅場町に牛乳搾取の牧場をはじめ、同郷の伊藤重左衛門の長女とくと結婚した。

一日18時間という同業者間随一の働きで、経済的に余裕を生じ、茶の湯を学び、和歌をも詠むようになった。

子規の歌論に感じ、子規を訪い、門下となる。初めて子規を尋ねたのは明治33年1月2日とされ、子規32歳、左千夫35歳で、3歳の年長であったが、心服した子規に謙虚に師事して足繁く通った。

左千夫の子規訪問は「仰臥漫録」に、しばしば手土産（主として喰物）を持参することが書かれている。子規晩年には石油ストーブや、石炭ストーブを寄贈して、その据付けにも尽力している。

牛飼（うしかい）が歌よむ時に世の中の新しき歌大いにおこる

右の歌は、師事して間もなく、子規に示したものだが、子規は「悟不悟ノ歌　左千夫ニ贈ル」（明治33年）において、この左千夫の歌を踏まえ

茶博士ヲイヤシキ人ト牛飼ヲタフトキ業（ナリ）ト知ル時花咲ク

と歌った。左千夫に茶の湯の趣味があり、伝統的な風雅より、生活実感に根ざした牛飼の歌に期待したのであろう。子規の周辺の人々は、多くは書生っぽい人が多かったが、左千夫は生活者の牛飼の気風をもちこんだことを云ったものであろう。

左千夫は子規の寒気に弱いのを心配した。事実、9月には早くも湯婆（ゆたんぽ）と懐爐を用いているのである。東京よりははるかに温暖な興津への移転を提唱したところが、子規は大いに乗気になった。

子規の周辺でも、たちまち賛否の議論が起った。最も強硬な反対論は、師の内藤鳴雪であった。このため鳴雪・子規の間で激論がたたかわされた。互に声高に罵り合うほどのものであった。

子規自らも移転の得失それぞれ12ヵ条を執筆したが、害の方の主なものとしては、途中の困難とその影響を挙げ、良医なき事も考慮され、転居後再び帰京しようとしてもむずかしいだろうと、病気の進展が予想された。利としては何よりも気候暖く寒暖の変化が少いことと、空気が良いことが挙げられた。

結局、大勢は次第に反対論に傾き、問題は2ヵ月を経て、明治33年10月16日午後4時頃から、虚子、碧梧桐、左千夫、岡　麓の4人が集って晩飯を喰べながら、さしたる話もないうちになんとなく取り止めということになった。鳴雪や叔父加藤拓川、羯南などの反対論が底にはあったのであろうが、子規自身も弱気になったのは否めない。